Sheku Kanneh-Mason

シェク・カネー=メイソン

◆チェロ

1999年、イギリス・ノッティンガム生まれ。2016年5月（17歳）、BBCヤング・ミュージシャンのコンクールにおける決勝でショスタコーヴィチ「チェロ協奏曲第1番」で優勝。2018年5月19日にウィンザー城の聖ジョージ礼拝堂で行われる英王室のヘンリー王子とメーガン・マークルのロイヤル・ウェディングにおける音楽セレモニーへの出演が世界的に注目を集めた。

取材・文・写真＝中東生

2018年、英国のヘンリー王子（ハリー王子）の結婚式で流れてきたチェロの音に心を奪われてから4年、シェク・カネー=メイソンがツアーでミュンヘンを訪れた際に、ようやくインタヴューが実現した。

――ロイヤル・ウェディングでの演奏はどのような経緯で決まったのですか。

「結婚式の1年ほど前にハリー王子が僕の演奏を聴いてくださったようで、半年ほど前に王室からコンタクトがありました。当日は、ただただ、参列者の前で弾けることを楽しんでいました。聴衆と音楽をシェアできるのは楽しい体験です」

――あの演奏を聴いてからというもの、ほかのチェリストが弾いていてもあなたの音色を探してしまったりするようになりました。あなたの温かい音はどこから来ているのでしょうか。

「それはうれしいです！ いろいろな要素が考えられますが、音楽のディテールを追求して弾くからかもしれません。和音や旋律などを意識のなかに鮮明に刻みつけるのです。練習時にもそれを意識し、そのように構築された音楽と対話している感じです。音楽というものは、楽譜に凝縮されたディテールを深く読み込むことに対してとてもオープンな存在なので、多くのことを読み取りたいと思っています。和音進行から言葉も読み取り、場面を想像します。楽譜以外にも、作曲家の言葉から世界を広げるのは興味ぶかい道程です。そうして自分の視点で楽譜から理解したことを信じて弾きます。いまも1カ月に1回はハンナ・ロバーツ先生のところに通っています」

――演奏中よく唇を固く結ばれますね！

自分の視点で楽譜から理解したことを信じて弾きます

■CD

「ソング」

〈演奏〉シェク・カネー=メイソン（vc）

〈曲目〉アイルランド民謡（シェク編）《ダウン州の輝ける星》、ヴィラ=ロボス（S.パーキン編）《ブラジル風バッハ》第1番から「第2曲 前奏曲」、J.S.バッハ（シェク編）「コラール《来たれ、異教徒の救い主よ》」、バート・バカラック（シェク編）《小さな願い》、他

［輸入盤485-3169］

「世紀のロイヤル・ウェディング2018」

〈演奏〉シェク・カネー=メイソン（vc）、他［UM-UCCL1207］

「それは興味ぶかい表現ですね！ 自分では特別に意識しているわけではなく、そのときに心のなかで起こっていることに反応しているのでしょう。その癖は7、8歳のころの演奏ビデオにも見られるし、レッスン中でも、なにかにフォーカスしているときにそうなるようです」

――そして視線は宙を仰いで、いま弾こうとしている音を目で追っているようです。

「チェロのほうを見て弾くとクローズな音になります。頭を上げると、音が空間を満たしてくれます。そして自由になれ、心地よく感じ、自分の思いがより強く相手に伝わると思います」

――9月に発売された新譜『ソング』も、あなたの多彩さが詰まったすばらしいポートレイトですね。J・S・バッハでは宗教性も感じられます。

「僕は特定の宗教に傾倒しているわけではありませんが、スピリチュアルな人間だと思っています。音楽はなにか上の、雄大なものとつながる手段のようにも感じられ、その観点からも音楽は僕にとって特別な存在です。たとえば300年以上前に作られたJ・S・バッハの音楽を演奏すると、彼がまだ生きていると感じる、それが音楽の特別なゆえんです」

――そんなあなたの演奏を日本で聴ける機会が待ち遠しいです。

「ここ数年は状況が難しく延期されていましたが、2023年の初訪日を調整中です。姉のピアノとのデュオ・リサイタルなので、二人でいまからワクワクしています」

まるで口から出ようとする歌声を体内に留めて、チェロに歌わせているように思えます。